

---

# アカシック・コード

通天閣ひぐま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アカシック・コード

### 【Nコード】

N0285F

### 【作者名】

通天閣ひぐま

### 【あらすじ】

宏美は、ある日校庭で苛めを目撃する。そして、その夜に不思議な夢をみた宏美は、自分の顔が蒼白になっている事に気がつく。それでも学校へ通学しようとするが……。夢と現実の境目が消え、夢が現実へと置き換わる。

## 第1話：幻聴

放課後、帰宅しようとして校庭に出た時の事。空は、どんよりと曇り空で今にも雨が降りそうだった。宏美は、一度空を見上げててからすぐに校庭を見渡した。

そして、ある一点に目を止めるとため息をつくのだった。

「また、……………やってる」

宏美が目を止めた先には、同じクラスの屈強な男子がひ弱な男子をいじめてる姿があった。その光景は珍しいものではなく。このところ毎日見かける姿だった。宏美がそのことに気をかけるまでもなく、その事は、校内で有名な出来事になっていた。

だからって、教員達が騒ぎ立てることもなく、そんな光景がここ最近頻繁に続いていた。

いい加減うんざりといった感じで宏美は、それを眺めていた。いじめられてる男子を助ける気なんて、宏美には無い。結局いじめなんて自分で解決するしかないってわかっていたし。教員に訴えたところで動いてくれるとは、思えない。

でも、毎日それを見るのは、気分のおいもではなかった。その日の夜、宏美は、机に向かって古びた手鏡の中に映った自分の顔を眺めながら、いじめを行っていた男子生徒のことを思っていた。

「どうして、あんなことをするのか？あんなやつ、死んでしまえばよいのに」

……………そう……………だね……………。

宏美は、思わず呟いた自分の言葉にハツとした。

「何？ 誰か……私の言葉に返事したような……気のせい？ ……まさか」

さつき呟いた自分の言葉に誰かが返事した。

そんな錯覚が突然宏美を襲った。

しかし、気のせいだと自分に言い聞かせて宏美は、古い手鏡を机の引き出しの中にしまいこんだ。

刃渡り3cmほどの小さなナイフ。

キラリと銀色に光るそれは、たとえ非力な女性が扱ったとしても軽く肉に食い込み、生命の糸を難なく断ち切るだけの鋭さがあった。

宏美は、そんなナイフを左手に持って軽く降ってみた。獲物を突き刺し、切り裂くような動作をやってみる。

「フツ…フフツ」

宏美は、心を躍らせるように笑みを浮かべた。

自分の左手に持ったナイフが人の身体に突き刺さったらとても痛いだろうな。

逆に自分の身体に刺さったら、悲鳴をあげるかしら。

と、そんな事を想像して、宏美は、楽しそうにナイフを眺めた。

「フツ…もうすぐだよ。もうすぐしたら、彼がやってくる」

宏美は、ナイフを見つめながら、そう呟いた。今は、真夜中の2時半を周ったところ。

街は、暗い闇に覆われて、宏美の居るビルとビルの間裏路地は、

まさしく闇そのものだった。もうすぐ彼がやってくる。そう、それは確かな事だった。だって、何度も彼の後をつけて確かめたのだ。この時間帯には、必ずこの闇にも等しい裏路地を通って、彼は、帰宅するのだ。

暫く時間が経つのも忘れて、ナイフを眺めていると誰かが裏路地へやってくる足音が聞こえてきた。

カッン…カッン…カッン

と、革靴の底に鉄板でも張り合わせた靴を履いて歩いている様な甲高い足音が宏美の方へ近づいてきた。

宮里亮二。

それが宏美の目の前にやってきた彼の名前だ。彼は、宏美と同じ学校に通う同級生であった。そして、彼は、学校ではとても有名な人だった。今日も彼が学校の校庭でいじめを行っているのを宏美は、目撃していた。

宮里亮二は、何時もの帰宅ルートであるビルとビルの間にある裏路地へ何の迷いもなく身を滑り込ませた。

目の前にあるのは、闇そのもの。

まったく視界きかない場所であったが普段から通りなれた道で迷う事はなかった。自分の中にある感覚で歩けば、いつもこの闇を通り抜ける事ができた。

しかし、今日は様子が少し違った。

この暗闇の中から、別の息つかいが聞こえてきたのだ。まるで獣のような……息つかい。何か闇の中で存在しているような感じを宮里亮二は、感じとっていた。少し警戒を強めて、立ち止まると一

寸先の闇を凝視する。  
すると、どうだろうか。

白い、まるで女性の肌の様な白い手をスーと伸びてきて宮里亮二の首を掴んだ。

「うつ…グッ」

強烈な握力で自分の首を締め上げてくる。

宮里亮二は、むせかえる様に声を漏らした。

「だっ…誰…だ？」

その問いを待たずにもう一つの白い手が宮里亮二の胸の辺りにトンと置かれた。

何の拍子もなく。

無拍子で置かれたその白い手には、ナイフが握られていた。

「ゲフッ」

息がするのも困難なほど自分の中の血が逆流して喉元まで負い寄せてくる感覚でようやく、自分は、何かナイフのようなモノで胸を刺されたのだと宮里亮二は、理解した。

## 第2話：双子

宏美の足元には、宮里亮二がうつ伏せに倒れていた。

息はしていない。

宏美は、先程、彼の胸にナイフで一突きしたのだ。ナイフの刃は、彼の心臓まで届き……その活動を止めてしまった。宏美は、虚ろな目で倒れている宮里亮二の遺体をしばらく眺めていた。宏美は、この時の為に準備した大きなビニール製のバッグから、木材等を切り倒す時に用いられるチェーン……ソーを取り出した。重そうなチェーン……ソーを宏美は、腰辺りで構えると……エンジンのスターターボタンを押した。

ブルン！

とエンジンがうなり声を上げて、チェーン……ソーの刃が高速回転を始めた。宏美は、そのチェーン……ソーを振り上げると、宮里亮二の首元めがけて振り下ろした。そこで、宏美の視界が急に暗転した。

「ぎゃあああああああ！！！」

宏美は、悲鳴を上げてベットから飛び起きた。いったい何が起きたのだろう。今までの体験は、自分自身が見た夢である事を理解するまで少し時間がかかった。あんなに生々しい夢を見たのは、何年ぶりだろう。と、宏美は、深くため息をついた。

宮里亮二……………。

彼の事は、大嫌いだが……何も殺すほど憎いつてわけでもなかった。たしかに、「死んじゃえばいいのに」なんて、口にしてたが。あんな夢を見るなんて……本心は、それを望んでいるのかな。と、宏美は、もう一度ため息を付いた。

ベッドの上から、這いずる様に出ると、宏美は、時間を確認した。

まだ十分、学校に行くまでの時間に余裕があった。何時も起きるより、30分早い程度。

宏美は、ベットから部屋の角にある机に向かった。机の引き出しから、あの手鏡を取り出して自分の顔を覗き込んでみる。

「酷い……顔」

宏美は、自分の顔見て少し驚いた。余りにも顔色が良くなかったからだ。しかし、身体の調子は、それほどだるいってわけでもなかった。宏美は、暫く悩んだすえ、学校へ行く事に決めた。顔色の悪さは、なんとか化粧で誤魔化せるし、身体がだるくないって言うのが大きかった。

宏美は、学校の校門前で足を止めた。

普段なら、こんな所で足を止める事なんて無いのだが。今日に限って、様子がおかしかったからだ。校門の前には、学校に入ろうとしている生徒達が行列を作って並んでいたのだ。校門の前には、警察官らしき人物が数人立っていて、通学する生徒達に一人ずつ何かを聞き出している様子だった。

「なんだろ……あれ」



宏美は、周りを見渡して近くに知り合いが居ないか探した。すると、丁度最後尾の列に並んでいる同じクラスの友達……絵里の姿を見つけた。

宏美は、すぐさま絵里の元へ向かう。

「……絵里!？」

「ん? ああ、宏美っ! おはよう」

「うん、おはよう」

宏美と絵里は、お互いに挨拶を交わす。

そして、二人共同じ様に校門の前に居る警察官に目を移した。

「どうなっているの?」

「ああ、あれ?」

「うん」

「私も噂ぐらいしか聞いてないんだけど……。ほら、宮里亮二って奴いたじゃん?」

「えっ? あの苛めっ子?」

「そそ、あの宮里亮二が殺されたんだって……。それも五体バラバラで、何処かの裏路地で見つかったとか」

「……………」

宏美は、驚いて声が出せないでいた。絵里の話がそのままあの夢の通りではないか。  
と、宏美は身震いを覚えた。

「それでね。あんな所で生徒捕まえて何か聞き出してるだって。いい迷惑よね？」

絵里は、そう言って校門の前に居る警察官をにらみつけた。

宏美は、宮里亮二の死を絵里に聞かされてから今朝見た夢の出来事を鮮明に思いだしていた。夢だと言つに……まるで体験してきたかのようなリアルな記憶が自分の中にある事に宏美は、気づいてしまった。

「やだ………そんな」

夢の中で宮里亮二を殺しているシーンが何度も宏美の頭の中で駆け巡った。

「えっ？ちよつと！？ 宏美？ どうしたのよ？」

絵里は、宏美の様子がおかしいのに気づき声を掛けた。

「……………え？ 絵里……………」

「宏美？ 大丈夫？ 顔色が真っ青だよ」

絵里は、宏美の顔を覗き込むと、そういつて額に手を当てた。

やっぱり、薄化粧ぐらいじゃ顔色が悪いのは、隠せないらしいと宏美は、ため息をつく。

「大丈夫だよ。お昼になる頃には、元気になっているからさ」

「ええ、本当に？」

絵里は、宏美の言葉が信じられない様子で疑いの瞳でジロリと見据えた。

二人がそんなやり取りとしていると、校門前で起きている異常事態に気づいた教師達が数人校門前にやってきた。

そして、警察官達と何か口論を始めるのだった。その隙に学生達は、校門をすり抜けて、そそくさと校舎の中へ駆け出した。宏美と絵里も隙をついて校舎の中に入った。

しかし、宏美は、絵里にがっしりと腕を掴まれて、まるで引きずられるように保険室の前まで連れてこられた。

「宏美、今日は、ここで大人しくしてなさい！」

「え？ でも……………」

「宏美？ 本当に見いて心配するほど顔色悪いよ。こんな時は、大人しくして居た方が良かったって」

そんな絵里の言葉に宏美は、仕方がなく保健室で休む事にした。保健室のベッドで横になった宏美は、目を閉じてみたが……………眠れそうになかった。またあの夢を見てしまいそうで眠るのが怖かったのだ。それでも横になっている内にウツラウツラと睡魔が襲ってきた。そんな時である。

ガサガサ

と、宏美は、何者かが保健室で何かを行っている気配を感じた。最初は、保険の先生でもやってきたのだろうと思ったが薄っすらと目を開けるとその姿は、セーラー服を着ている生徒の様だった。宏美は、ハツとして今度は、完全に目が覚めた。宏美は、保健室に居る生徒の姿を確認しようと部屋の周りを見渡した。保健室の窓から、外の運動場を眺めている生徒の姿を見つけた宏美は、声を掛けてみる事にした。

「こんにちは」

宏美のその言葉に窓際の女生徒は、驚いた様子で振り返った。

「え!？」

宏美は、驚きで声が出なかった。窓際には、まるで鏡でも見ているような自分とソックリな人物がそこに存在していたのだ。

「こんにちは、お姉さん」

そして、その宏美にソックリな女生徒は、そう言葉を返してきた。

宏美は、混乱していた。

どうして、この子は、私とソックリなの。

どうして、この子は、私の事をお姉さんって呼ぶの。

私は、一人っ子だし、妹が居るなんて話……聞いた事がない。と、宏美は、突然現れた理解しがたい人物に目が離せないでいた。いったいこの子は、いったい誰なんだろうと宏美の頭中は、正しい解答を得ようとフル回転を始めるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0285f/>

---

アカシック・コード

2010年10月17日11時04分発行